



フィリピンスタディツアー2016夏

参加者レポート集



特定非営利活動法人ハロハロ

スタディツアー2016 夏に寄せて

この夏のツアーはご参加者がお友だちやご両親をお誘いいただき、参加者間の密なコミュニケーションや助け合いがあつて、とても有意義な経験を共有できたように思います。皆様のご参加、誠にありがとうございました。

私どもの事業は「交流」が最大のポイントです。文化的社会的背景や価値観の異なる現場の人々と、密なコミュニケーションのもとに、ともに生きる場を作っております。私どもの「現場」という言葉には、地域の人々はもちろんですがそこを訪れる日本人もまた含まれます。今回のツアー中、日本とは大きく異なる生活面において参加者同士での助け合いがあつたからこそ、地域の人々との交流が積極的に行われたと感じています。良い面も悪い面もご参加者の皆さまが感じ体験したことを素直に共有いただいたことで、地域の人々からも建前ではない本当の想いや意見を得ることができました。

ハロハロは、異なる面を持つ人々が交流を深めることで、お互いを理解し自分自身の視野を広げ、自分と他者相互の可能性を世界へ拓くことをビジョンとしています。はるばる海を越えてフィリピンの現場までいらして下さった皆さまの姿勢と想いが地域の人々に伝わり、一人ではないからこそ挑戦できる、大きな「動く力」になっています。皆様が出会ったフィリピンの人々は、皆様のことをとても大切に思い、皆様の幸せも願っています。どうぞ、皆様自身そして世界が豊かに生きる想いと力を大切になさって下さい。ありがとうございました。

特定非営利活動法人ハロハロ 理事長 成瀬 悠

(会計報告)

収入合計 332,000 円

内訳：

セブ参加費 4名 259,200 円 マニラ参加費 3名 60,000 円 会費 18,000 円

支出合計 332,000 円

内訳：

マニラ現地経費 50,910 円

宿泊費 11,244 円 人件費 4,680 円 飲食費 19,006 円

消耗品費 1,560 円 旅費交通費 2,720 円

セブ現地経費 84,162 円

宿泊費 29,302 円 人件費 11,960 円 飲食費 19,500 円

消耗品費 1040 円 旅費交通費 6760 円

日本 146,759 円

人件費 42,000 円 事務経費 25,000 円 旅費交通費 79,759 円

寄付金 62,389 円

マニラ現地協働団体寄付金 11,700 円 *PaaralangPantao と Samakabai へ寄付

セブ現地協働団体寄付金 15,600 円

ハロハロ寄付金 35,089 円

サポーター会費 18,000 円

スタディーツアーレポート

佐藤萌乃

8月8日から13日までセブスタディーツアーに参加しました。今までNPOやNGOなどの活動に参加したことが一度もありませんでした。そんな時このハロハロさんの活動を知り、この機会に自分の知識を増やしたいと思い参加を決めました。

この6日間はすごく濃い日々で見るもの体験することすべてが私にとって新鮮なものでした。どれも記憶に残っていますがその中でもより印象深く残っていることがあります。まずダンプサイドです。写真で何度かごみ捨て場の様子を見たことがあったけど実際にその場に立つと大量のごみの山やその臭いに衝撃を受けました。暑いしきつい臭いが漂う中様々な人がその日生活していけるお金を求め一生懸命プラスチックなどを探していました。そのなかで17歳の少女に会いました。私とそんなに歳は変わらないのに私と全く違うことを知りました。私たちは毎日学校に行き一日勉強することができます、しかし彼女は教育を受けられず毎日このダンプサイドで一日中お金を貯めるために働いています。また私たちは小、中、高と当たり前のように教育を受け続けられたし、放課後には友達と遊んだり部活動に励んだりできました。でも彼女は小学二年生には学校に行けなくなりそれからずっと働いています。私たちが当たり前だと思っていたことが当たり前でなくどれだけ幸せで恵まれているのか、そんなことを考えたことがなかった私には心が痛み言葉が出ませんでした。フィリピンの教育機関がよくなることを願うと同時にこれからの大学生活を大切にしようと心に決めました。



漁師さんの話もとても印象深かったです。違法だとわかりながらも家庭を守るため、その日食べていくためダイナマイト漁に手を出す人、中にはダイナマイトの事故で自分の手を失ってしまう人がいました。自分の身を削って働いたことも、次の日食べていけるかもわからない状況になったこともなかったわたしからすると想像もつかない話ばかりでした。ここでは一日漁に出られないだけでも家庭の経済環境は悪化してしまい、私たちがお話を聞いたときすでに五日間も漁に出られていませんでした。経済状況が不安定であるのに私たちの質問にこたえてくれ、常に笑顔を見せてくれる姿に心の強さと温かさを感じました。

最後にこのことが一番心に残って忘れられないものとなり、日本に帰りたくない大きな理由にもなりました。それはホストファミリーをはじめ地域の皆さんが温かく向かい入れサポートをしてくれて常に笑顔でいてくれたということです。本当に温かい人ばかりでした。作った日本料理に自信がなかったとき「大丈夫!」「おいしいよ」と食べてくれて、英

語が苦手であまく伝えられないときも身振りで一生懸命理解しようとしてくれて、おいしい料理を作ってくれて、笑顔でいてくれて四日間があつという間に過ぎていきました。近所の人たちも私たち日本人に積極的に話しかけてくれて家族を超えての交流ができました。まるで地域全体が大きな家族のようでした。毎日様々なところで笑い声が聞こえているいろいろな人に挨拶している光景は日本ではあまり見られません。経済状況や設備ははるかに良く、一見日本のほうが豊かだし住みやすいです。でもこの地域は常に人との触れ合いがあり、時に近所の人困っていたら助け合い日本とは違う温かさを毎日感じられました。別れの時、第二の我が家を巣立つようで悲しく涙が出てきました。経済状況が不安定の中私たちを明るく迎え入れてくれて感謝の気持ちで一杯です。

この六日間はどれも勉強になることばかりでした。フィリピンの今の状況、実際に行ってみないとわからないことなど多くの知識を得ることができました。このツアーに参加できたことは人生の中でも特別な経験となり今までの自分を見つめなおしこれからを考えていくきっかけになりました。行くまでのスラム街のイメージは『危ない』だったけど今は違います。行ってみなければわからなかった具体的な経済状況、地域の活動、そして地域の人々の明るさとやさしさすべてを知りイメージは変わりました。私の周りにはまだあまりよくわかってない人もいたので得られた知識を多くの人に伝えたいです。このような貴重な体験ができてほんとによかったです！
ありがとうございました！！



スタディツアーレポート

佐藤琴乃

私が今回この企画に参加したきっかけは友人に誘われたからです。また、今年大学1年生ということもあり、今までとは違う体験をしてみたいという思いから今回参加させていただきました。

正直フィリピンに行くまでボランティア活動というものをした事がなく、どんな風に活動するのかあまり分かっていませんでした。そもそもフィリピンの人たちが実際どんな生活をしているのかさえテレビで見

るくらいの情報しか分かっていませんでした。それにセブ島と聞くとどうしても観光地として有名な所だという印象からスラム街でもそんな私たちと生活は大して変わらない、そんな風に思っていました。

しかし、実際は全く違うものでダンプサイトやホームステイ先の様子を見たとき想像以上の光景が飛び込んできて言葉を失ってしまうほどでした。今まで日本という当たり前が通用する国で暮らしていた自分がどれだけ楽な暮らしをしていたのかフィリピンに来て本当に分かった気がします。



～今回の企画で特に印象に残った事～

((コミュニティに人たちの温かさ・協力性))

私は今回、これが1番！ってくらい現地の人たちの人柄に驚きました。フィリピンに行く前インターネットで日本は親切な国だ・マナーがしっかりしているなどという記事を見たことがありました。だからフィリピンに行ったとしてもやっぱり日本が1番だなと思うだろうなと考えていました。しかし、それは思い込みからによるとても軽い考えであったと痛感させられました。どこの誰かも分からない、いきなり来た私たちをととても嬉しそうに迎え入れてくれて、ホストファミリーだけでなく近所の人たちまで笑顔で私たちに挨拶してくれてこんな反応が来ると思っていなかったのが本当に嬉しかったです。また日本では見る事の出来ないコミュニティ内での家族を超えての助け合い、これは本当に羨ましくすぎる、私もこんな生活をしたい！と心から思えるくらい素晴らしいものでした。

具体的に言うと私たち日本人が現地の人たちに日本料理を振る舞うという時に、ホームステイ先の家にある包丁と鍋の数だけでは足りないと分かったらすぐに隣の家の人が包丁と鍋を快く貸してくれて、しかもお肉がなかなか切れなかった私を見かねて「これを切る

の？」と言って

切ってくれて、本当は私たちが振る舞う側なのに逆にいい気分させてもらったり。自分の子供でなくてもしっかり怒り、しっかり可愛がり日本人にはない温かさ、日本にいたらきっと味わえないであろう温かさを感じられました。

正直最初、ホームステイ先の家を見たとき「私、3日間やっていけないかも....」と思っていました。でも現地の人たちの温かさを身をもって感じ、最後は、ここから帰りたくない！ずっとここにいたい！と思うほど現地の人たちの温かさが私たちを包んでくれました。

本当に本当に来てよかった！！そう心から感じられました。

経済面から日本とフィリピンを比べれば確かに日本の方が優位な位置にいるかもしれない。だけどフィリピンという国を肌で感じ、生活が豊かであるから幸せに暮らせる、逆に貧しいから幸せではないなんてことは決してない。困難な時こそ笑い、みんなで助け合う、それがどんなに大切か、どれだけ効果がある事か思い知らされました。本当にフィリピンの人々にはいい意味で色々な事を裏切られました。

私もフィリピンの人たちに負けないくらい頑張って笑顔を忘れず生きていかなきゃなと思います。

本当に最高の夏、貴重な夏を過ごす事ができました。

ありがとうございました！！



スタディーツアーレポート

中村 佳美

初めてフィリピンに行き、マニラやセブでいろいろな方々と出会い、たくさんのことを学ばせていただきました。

マニラのパーラランパンタオ校では、先生方が幼い子供達に一つ一つ丁寧に教えていらっしゃる姿を拝見し、幼児教育の大切さを感じました。学習だけでなく、身の回りのことから社会のマナーやルールまで、教える内容がたくさんあることがわかりました。

ユニカセという社会貢献のレストランでは、物資の支援ではなく50年以上の将来を見据えた若者の自立（経済的、健康的、精神的）をめざしていました。

貧困から抜け出すことの難しさや仕事をしたいという気持ちを養っていくことが大切だと感じました。

セブでは、ダンプサイト（ごみ捨て場）で生活をする人々の様子を拝見しました。一時閉鎖されていたため、生活の場を失った方々が困り、再開を喜んだという話を伺い、胸が詰まる思いでした。また3日間のホームステイでは、大変貴重な体験をさせていただきました。ホストファミリーの方々の心の温かさに触れ、日本の生活とのギャップもすぐになくなりました。近所の方々も毎日大勢集まり、日本の生活について話したり写真を見せたりすると、とても興味を示されていて驚きました。一緒に生活をさせていただいたことで、言葉が通じなくてもフィリピンの方々の思いが伝わってきて、たった3日間でもたくさんのことを教わりました。年上の子供達がリーダーとなって遊びを工夫し、年下の子供達をまとめて皆で楽しく遊んでいる姿も印象的でした。またコミュニティも素晴らしく、キャプテンを中心に皆で話し合っ様々なことを決め、ゴミを拾って住んでいる所をきれいにしていこうとする団結力にも感心しました。家庭訪問をさせていただいたとき、気にかけてもらえることが嬉しいので、どんな質問をしても大丈夫だと伺い、たくさん質問をさせていただき家庭の様子がよくわかりました。グレマーさん夫妻の生き方にも感銘を受け、最後の日には、ホストファミリーの方々の思いも伺うことができ、一生忘れられない思い出となりました。

成瀬さんをはじめ、フィリピンで出会った方々に感謝しております。多くのことを学ばせていただき、私自身今後の生き方を考える良いきっかけとなりました。これから日本で自分の生活を見直し、自分自身少しでもできることを探していきたいと思います。大変貴重な経験をさせていただきありがとうございました。

スタディーツアーレポート

中村 友美

私は将来、発展途上国で働きたい、そのためにどのような支援の仕方があるのか、どのような視点から携わりたいのかを実際に自分自身で体験をして決めていきたいと思い、今回のハロハロのスタディーツアーに参加しました。このスタディーツアーは少人数で、大型バスなどは一切使わず、現地の方たちが実際に使う公共の乗り物を使って移動し、小さなコミュニティでホームステイをさせてもらったりと、普通ではできないちょっとしたサバイバルのような体験をしたり、実際に現地の方々と生活を共にしてたくさん関わることができました。そして、日本で私たちの生活と、大きく違うことが沢山あり、短い10日間でしたが、得られたものはものすごくたくさんありました。そのなかでも特に印象に残った体験3つについて書いていきたいと思います。

1つ目は、ダンプサイドを視察したことです。ダンプサイドとはゴミ山でできた地区です。生ゴミのような臭いで立ち込めていて、空気の中に細かい灰のようなものが含まれていて、健康な人でも正直長時間滞在するのは健康を害するようなところでした。そこで働いている人々はスカベンジャーと呼ばれていて、私は16歳の女の子に会いました。その子はお金の問題で、小学2年生で学校を辞め、スカベンジャーとして、ゴミを集めて生活するためのお金を作っていました。ダンプサイドは凄く大きな山でできていて、それらの崩壊や、感染症、肺炎などの問題があり、特に子供たちには凄く危険な地域でした。もちろん日本では到底目にすることの出来ない光景なので、私にはすごく刺激的で、言葉を失いました。

2つ目は、私たちがステイさせてもらったコミュニティのお宅を訪問し、お話を聞いた時のことです。そのお家は、両親と小さな赤ちゃんの3人家族で生活をしていて、日中旦那さんは仕事に出ていました。とても驚いたことは、奥さんはなんと私より年下の16歳だったことです。その奥さんに話を沢山聞くことができました。彼女は、幼い頃あまり親御さんとの関係が良くなかったのですが、今の素敵な旦那さんに出会い恋に落ちたのだそうです。そのあと若くして妊娠し、子育てのため学校を中退したそうです。ただ、私が驚いたことは、中退したらもう一度教育を受け直すのはとても難しいそうです。高校や大学を卒業することによって収入の高い職につけるので、一回学校を辞めてしまってから、教育の大切さに気づく人が多いそうなのですが、もう一度学校に入るのにテストを受けなくてはならず、そのテストが思うようにパス出来なくて、教育を受け直すことがとても難しいと言っていました。

そして3つ目は、フィリピンの方々の明るさや温かさです。初めは地域の方々が私たちを快く受け入れてくれるのか心配はありました。しかし、初日からすごく沢山の方が歓迎してくださり、美味しいご飯を沢山作ってくれたり、重いバケツを井戸から運んでくれたりと、私たちが快適に過ごせるようにしてくれたので、3日間過ぎるのがとても早く感

じました。特に子供達がすごく人懐っこくて、わたしの手を引いてフィリピンの遊びに混ぜてくれました。私が夕飯をホストの家で食べていると、沢山の幼稚園と小学校くらいの子供達が、自分の夕食を急いで済まして私が食べ終わるのを目の前でずっと待っていました。さらに一番驚いたのは、私がシャワーを浴びに行った時のことです。シャワーはトイレで水浴びをするという感じでした。

私がシャワーを浴びに行こうとしたら3人の女の子たちが付いて来たので、私は、「シャワー浴びるから後で遊ぼうね。」と伝えました。

そして15分くらいシャワーを浴びてトイレから出ると、ドアの目の前で彼女たちはずっと待っていたのです。



わたしはそれがすごく嬉しくて、本当はその後洗濯をしようと思っていたのですが、すぐに荷物を置いて彼女たちと遊びました。私たちが訪ねた地域の方々は、1日1日を生きているのがサバイバルだと言っていました。しかし、辛い状況に置かれている時こそ笑うのがフィリピンの方々の特徴だそうです。そのことを実際に見て実感することができ、本当に素晴らしい人たちだなと思いました。

他にもまだまだ沢山の方々のお話を聞かせて貰いました。そして、ハロハロさんが行っている活動に参加させて貰いました。地域のお母さん方たちに教えてもらいながらバックや小銭入れを作ったり、コミュニティの清掃活動やお母さん方のグループ集会に参加させてもらったりなど、日本では出来ない体験を沢山させていただきました。そしてハロハロさんは、大きな組織とは違い、活動の規模は小さいけれど、ただ寄付をするのではなく、地域の方々と接しながら一緒にいいコミュニティを作っているのだということが分かりました。今回の素晴らしい体験を踏まえて、今後何かに役立てて行きたいなと思います。



スタディーツアーレポート

國井 直温

会社の夏休みを活用して、マニラ・パヤタス地区訪問スタディーツアーに参加させていただきました。

・参加した目的。。。

私は以前、業務駐在としてセブに2年ほど生活した経験があります、それは会社の決められた環境下での生活であり、ある意味特殊な生活環境下での経験と思っています。セブでの2年間の滞在中に垣間見た、フィリピンの庶民のみなさんの生活風景は、私の50年ほど前の日本の田舎生活を呼び起こし、なにか懐かしさと親しみを覚えるものでした。一方で理解のできない生活上の困難や理不尽さもあるのではとも感じるところもあるのですが、フィリピンの人々の屈託のない笑顔にかくれて、リアルなことは知ることができませんでした。このような何か消化不良のような気持ちを少しでも解消するには、とにかくリアルな生活の事実を見て、感じてみるということが必要なかという思いを抱いていました。今回、ハロハロのスタディーツアーとタイミングも合い、特にこれまで接する機会のほとんど無いマニラ地区の人々の生活を少しでも体感できるのではないかとの思いで参加をいたしました。

・ツアーで見たこと、感じた事

<パヤタス>

かつての業務駐在時には、会社から乗ることを禁止されていたジープニー乗車を皮切りに、庶民の生活の流れの中にとりあえず身を置くことから体験がスターとし、パヤタス地区を初めて訪問しました。移動もですが、パヤタスに到着した時、違和感や驚きではなく、何か懐かしさを感じてしまった、自分自身がいました。（50数年前の小学校時代の私の田舎に戻ったような感覚に近い。。）

ただ、マニラ首都圏近郊という立地条件もあるのか、想定とは違い、道路等のインフラ環境は整っている感じを受けて、認識の修正を余儀なくされ、少し戸惑いを感じたいというのが率直なところです。

<Paaralang Pantao パヤタス校： PreSchool>

パヤタス校では、日曜日にも関わらず、パヤタス校に通っている幼稚園児の皆さんと楽しい時間を過ごさせていただきました。子供たちの明るい、かわいらしい笑顔とキラキラした瞳に、自分自身が何か幸せな瞬間を与えてもらった感じが忘れられない記憶となりました。

子供たちとの交流内容に十分準備ができなかったことが、残念でした。現場の先生には、具体的な要望のようなものがあるようにも感じました、事前にこの要望に応える努力が必要だったと反省。

パヤタス校舎内に宿泊させていただき、とっても美味しい夕食もごちそうになりました。

夕食時に、レティ校長先生のお話を伺うことができました。長年にわたり、確固たる信念のもと、自力で Preschool の拡大、運営をされてこられたことに、敬服いたしました。現状は素晴らしい教室施設を持っていますが、ここに至るまでの努力・困難は想像を絶するものがあると思われます。将来のコミュニティを担うことになる子供たちへの、教育活動が継続的かつ発展的に推進されることを期待したいと思いました。

<地域訪問 等>

家庭訪問と手工芸センターも体験させていただきました。想定とは異なり、インフラ部分や生活レベルが比較的整っている感じを受けました。家庭訪問は比較的生活レベルが安定した家庭が選ばれているようですので、あくまで、ごく一部として理解しました。手工芸センターも初期の設備投入支援がされていて、一定のインフラベースが整っている状態で、主体的な継続した運営、活動を維持することが課題であるのかと理解し、地域のお母さんたちの自助の力と主体的な行動に期待をしたいと思いました。

<Uniquease>

最終日、マニラ・マカティーのユニカセで昼食をいただきました。中村さんからは、ユニカセの活動についてプレゼンしていただきました。その中で、支援⇒自立に向けたトレーニング・機会提供⇒自立へという、三段階のステージの考え方と、第二段階をユニカセで実現したいとの思いを聞かせていただきました。ともすると、我々は第一段階の支援・援助に目が行くのですが、第二段階の重要性、必要性を再認識するとともに、それを実現されているユニカセに何か感動を覚えました。このような、生き方もあるのかと改めて考えさせられました。

・終わりに

2泊3日という、とっても短い時間での体験で、人々の生活の本当に瞬間に立ち合わせていただいただけですが、多くの刺激と感動をいただくことができました。私は、62歳、定年退職後のこれからの第二の人生を如何に生きるかのヒントになるのではと思っています。体験ツアーの機会を提供していただいたハロハロの皆さん・インターンの皆さん、一緒に体験ツアーに参加していただき楽しい時間を過ごさせていただいた中村さん親子に感謝！

<付録>



小物作り体験

難しい！！うまくできない！！

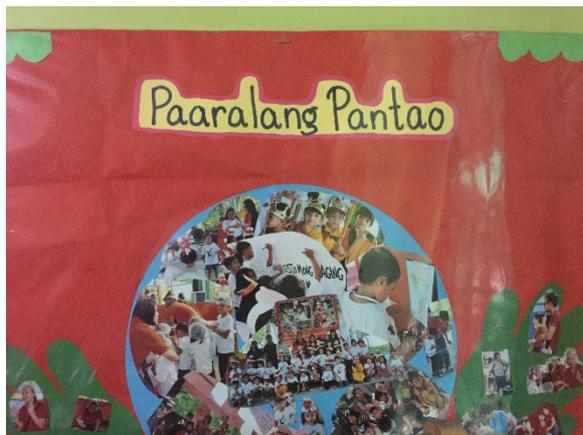
左：お母さん達作

右：國井作、途中で Give-up



手工芸センターのミシン設備

- ・支援団体からの支援：建物、ミシン等。
- ・電気代等はハロハロ支援



Paaralang Pantao パヤタス校

かわいい子供たち！！

明るくて、笑顔がかわいい！！！！



Paaralang Pantao パヤタス校

夕食をごちそうしていただきました！！！！美味しい！！！！！！

- ・煮込み（右）は 絶品！！！！
 - ・チキンのから揚げ（左） これも絶品！！！！
- フィリピンのお袋の味！！！！